

# KCELS

**Newsletter No.2**  
**MARCH 1987**

## KCELS 第11回年次大会を終えて

高瀬 ふみ子

「ガリバー旅行記」のなかに、ハレーすい星が地球に衝突するのではないかと、夜も眠れない人々の姿が描かれています。その後もすい星は接近を繰り返して、今年4月に、また姿をあらわし、視界の外へ去ってゆきました。時の流れにも一定の周期による刻み目があって、人類は過去の歩みに思いをこらす瞬間があたえられているようです。KCELS 年次大会も、このような刻み目かもしれません。この1カ年を顧りみるならば、今年ほど本学院が女性の教育、研究、主体的判断力養成の場であることの意義を痛感させられた刻み目はなかったように思われます。T. S. エリオットが、伝統と個人の才能の相関性を説いたことを思い出します。いわく、「現在が過去によって導かれるのと同じように、過去が現在によって変更される。」KCELS 年次大会という時の刻み目が、今後、それ自体の光栄を刻むと同時に、神戸女学院大学の過去をより豊かな、輝かしい評価をうけるものとするように、職を奉ずる教職員、卒業生、在校生の皆様の一層のご賛同、ご努力を願ってやみません。

## KCELS 第11回(1986年)大会報告

1986年10月31日(金)に、神戸女学院同窓会館で開催されました。

### ●特別講演(要旨)

"The Two Voices: Dickens and Tennyson  
as Spokesmen of their Age"

Leicester 大学名誉教授 Philip Collins 氏

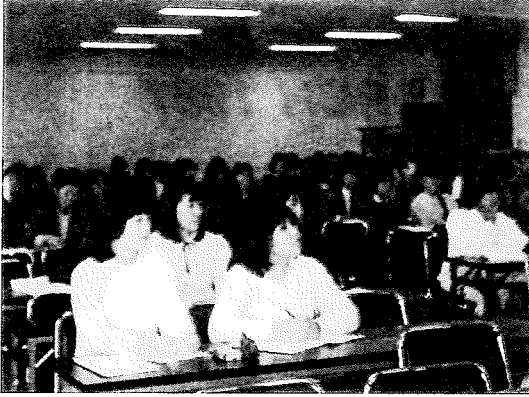
Dickens and Tennyson—born within three years of one another—both became prominent authors while still young, and had lengthy and very influential careers. Both enjoyed unprecedented "homage" (a word frequently applied to them) from their contemporaries: great esteem, unrivalled popularity, and very high incomes. Both had, long before their deaths, been destined for poets' Corner in Westminster Abbey, where they now lie.



Manifestly, what they wrote was much wanted and valued by contemporary readers, and, while no-one could agree with every sentiment or opinion that both of them uttered, or completely share in all of their interests and concerns, they were clearly spokesmen for substantial sections of their community—and both were read and admired by people of all classes, from the Queen to the working class. Their remarkable standing in society tells us something very significant about Victorian culture.

In some techniques and attitudes they were alike: both were "word-painters" (a new word in mid-century), both lauded "home and hearth", and both were admired for their pathos and later criticized for their sentimentality (Little Nell and the May-Queen died within two years of one another and were often mentioned together). In other ways they diverged. This was to some extent a reflection of their respective family backgrounds, upbringing and education, and their individual personalities, but it also related to differences between their respective forms, verse and prose, at this period. Thus Dickens is the great novelist of London, while urban life is rarely presented in Tennyson's poetry. Tennyson was country-born. Dickens was a townie—but also Victorian fiction was much ampler and more successful in dramatizing the city than were the poets of that time.

Philip Collins's lecture ranged over many central preoccupations of the period (social, political, religious, domestic), and assessed the respects in which, and the



degree to which, these two authors were its spokesmen. The question was also raised whether their being so was to the advantage, or the disadvantage, of their art.

### ●研究発表(要旨)

#### ウィリアム・フォークナーの 『土にまみれた旗』—「声」を 与えられた登場人物達— 大塩 恵子 (E95)

ウィリアム・フォークナーの作品において、過去や歴史のモチーフは、真理の問題というよりむしろ言語のそれとして、取り扱われている。ヨクナパトウファ・サガの始源とも言うべき彼の第三作目の小説『土にまみれた旗』においても、作品がサルトルの言う過去の絶対化という批判を免れ得るのは、まさにこの点を通じてなのである。

フォークナーの初期小説に見い出される言語についての考え方は、第二作の『蚊』から『土にまみれた旗』に至って大きな変化を遂げている。すなわち『旗』以前の作品が、物語の現在における登場人物達の体験の直接性のみ描き出すことを重んじて、物語の中でも言葉よりは視覚と眼差に基づくコミュニケーション、言語芸術よりは彫刻等の手工芸術に、真理に近づく手段としての優位性を認める一種の言語排斥主義、直接体験の超越論に陥っていたのに対し、『旗』に描かれた登場人物達は、自由に言葉と戯れこれを探る仕掛人達、また過去を題材に続々と色あいの異なる話を紡ぎ出す語り部達として、表わされているからである。

さてフォークナーにとって、人間の魂は常に時間と共に恒常的な変化の途上にあり、一旦過ぎ去った過去の経験は、二度と再び同じ真実と純粋さをもって追体験し得ないものである。それ故『旗』において描かれる、サー

トリス家に纏わる暴力と死の伝統も、絶対的な過去や運命そのものであるというよりは、一つの過去解決の物語、特にジェニー叔母の管理する家族の物語として示されているのであり、小説の中で繰り返される若いパイヤードの無軌道ぶりと反抗は、彼女のディスクールの影響下から逃れようとする、口べたな彼の無益な努力に他ならない。『旗』において、絶対と思われた叔母ジェニーのディスクールが破られるのは、パイヤードの行動によってではなくナルシッサの言葉によって、彼女が名付けた赤ん坊の名によってである。

#### 「傲れる石」—Pierre; or the Ambiguities 試論

辻本 庸子 (E90、院103)

メルヴィル第7作目の作品 *Pierre* (1852) は、その副題が示す通り、大変曖昧模糊とした作品である。そこに示される曖昧性が、如何なるものであるかを考察する為に、特に石というシンボルに着目してみる。作品中、そこかしこに現れる石には、主人公を悩まし続けた両義性—天上性、地上性の他にも暖かさ、冷たさ、豊穡性、不毛性など様々な意味が与えられている。これらの多義性には一定の価値観も与えられてはならず、全体として意味、価値共に流動的な混沌とした世界を作り上げているのである。この1つのシンボルを通して行なわれるイメージの積み上げと破壊という行為は、メルヴィルによって意図的になされたものであり、それは我々が理解する従来のシンボルの働きというものを完全に打ちこわしてしまうものである。これはついには我々が1つの事を認識するという基本的行為の可能性さえ奪いとってしまう。

同様の破壊作業は、登場人物像及び物語の筋立てにおいても認める事ができる。作者は、その時々断片的なイメージに忠実になり、細分化された要素の積み上げを行うが、それを作者の意図で修正する事を拒む。従って、一人物像あるいは一作品の筋立てという従来の雛形は一貫性を失い、空中分解してしまうのである。

楽観的な上昇志向の最も流布した19世紀半ばにあって、メルヴィルはこの作品を通し、物事の表面に惑わされる事なく真実をみきわめようとする「目覚めた人間」が直面する悲劇的状况を赤裸々に描き出した。そしてそんな状况を表出する手段として、シンボル、人物像、筋立てのいずれのレベルにおいても故意に破壊作用を行ない曖昧な態度を貫いたのである。この新しさ、破壊性ゆえに、この作品は「傲れる石」として、完全に拒絶される運命を辿ったのである。

### 会員による新出版ご紹介

・三宅 晶子氏

エズラ・パウンド生誕百年記念論文集  
「エズラ・パウンド研究」(福田陸太郎・安川昱編)  
1986年10月 山口書店 3,200円

・別府 恵子・馬場 美奈子両氏

「アメリカ文学を学ぶ人のために」(岩山太次郎編)  
1987年2月 世界思想社 1,900円

・金城 盛紀氏

「英文学を学ぶ人のために」(坂本完春編) 1987  
年3月 世界思想社 1,900円

### KCキャンパスに 「シェイクスピア園」開園近し

“Here's Flowers for You”

金城 盛紀

外国の文学を読んでいて、未知の植物が出てくるとどうしたらよいのであろうか。“apricot”を英和辞典で引いて、それが「アンズ」であることが分かれば、安ずであろう。ところが、“camomile”が「カミツレ」であると教えられても、つれない思いをさせられるのは私一人ではあるまい。このような場合、オックスフォードやウェブスターの辞典よりは、植物図鑑のお世話になったほうが具体性があるが、それでもピンとこないことがある。文学を、たんに観念的に、頭で理解するだけでなく、肌で感じ、心でも確かめたいと願う者にとって、生きた花や草木を、横文字やカタカナのまま素通りするのは、「隣人愛」を抽象語のまま終始させるのと同様、浅念である。聞きなれない西洋の樹木はすべて「ニワトコ」に統一して処理したえらい先生もいたそうだが、一木一草の美、また、何げない植物に託された意味を垣間見てしまった小心者には、そのような大先生の真似もできない。

「英文学において言及される本邦では接しがたい草木を植え育成できるよう」学院環境委員会へお願いしてみたのは、1983年の9月であった。キャンパスの片すみに一坪でも利用させていただけたらと期待していた。この小さな願いが、学院当局の慈雨に恵まれて、大きな実を結ぶことになった。図書館新館前の約1,000平方メートルが、「シェイクスピア園」として造園されることになったのである。運営委員会も、昨年末には発足した。代表は、家政学部長でもある植物生態学の矢野悟道教授。植物関係の方々の熱心な支持、というよりは牽引がある。

英文学科からも、泥谷(新学科長)、上、金城の三名が参加している。「瓢箪から出た駒」といえば失礼であるが、望外の展開である。

シェイクスピアが言及している植物は170種余とされている。そのなかには、タマネギ、ニンニクといった散文的な食用種もある。イギリス人が慣れ親しんでいても日本では見られないセイヨウサンザシ、シェイクスピア誕生のころイギリスへ伝えられた愛の灌木ギンバイカもある。「惚れスミレ」も、その解毒剤たるイタリアニンジンボクもあるが、どっちが人気があるのやら。学院構内にはこのような珍種、「高嶺の花」も含めて、すでに50種以上も集められている。ヨーロッパとは気候・土壌も異なるのであるから、育成困難な品種もあろうが、できる限り多く収集するつもりである。

「全能なる神、はじめに庭園を造りたもうた。庭園は、人間の悦楽のなかでもっとも純粋なものである。それは人間の精神をもっとも爽快にするものである」とはシェイクスピアの同時代人フランシス・ベーコンの言である。ベーコンが提唱する「王侯にふさわしい」庭園は、30エーカー(12ヘクタール)以上というから、あまり参考にはならない。岡田山校地全体でも約14ヘクタールである。しかし、盆栽、生け花に小宇宙をつくりだした伝統のある東洋の島国、1,000平方メートルにシェイクスピア世界を彷彿することも不可能ではあるまい。この庭園の草の葉にふれて、創造の妙に打たれ、ドラマの世界の哀楽悲喜に関わることに相なることがあるかもしれない。園案内のパンフレットも準備することになっている。

日本英学の泰斗であった市川三喜教授は、昭和初期、東京のご自宅にシェイクスピア・ガーデンを造られたそうである。しかし、シェイクスピアの植物を、組織的に収集し育成することが期待されても、実行に移された話は聞かない。本学院のシェイクスピア園が、美しいキャンパスに新たな花を添え、英文学の華の理解・鑑賞の助けともなり、また、精神を爽快にするのであれば、学園の香気もいっそう馥郁となると期待できようか。

## 会 則

(1) 名 称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目 的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

## (3) 構成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

## (4) 会費

正会員は年会費を納入する。

## (5) 活動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletter を発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

## 会 員 消 息

- 金城盛紀氏 (神戸女学院大学教授)  
英国 Cambridge 大学での一年間の研究を終えられ  
1986年9月帰校されました。
- 平井雅子氏 (神戸女学院大学助教授)  
1986年10月より英国 Cambridge 大学で、一年間のご  
予定で留学中です。
- C.V.Broderick 氏 (神戸女学院大学教授)  
1987年4月より本学英文学科との交換教授提携校であ  
る米国 Michigan 州立大学へ一年間、赴任されます。
- 新野 緑氏 (E96、院98)  
1987年4月より神戸市外国語大学に専任講師として就  
任されます。
- 田中敬子氏 (E90)  
1987年4月より神戸商科大学に専任講師として就任さ  
れます。
- 難波江仁美氏 (E97、院99)  
1987年4月より親和女子大学に専任講師として就任さ  
れます。

## 編 集 後 記

KCELS 10周年の昨年、記念すべき発刊をみた Newsletter 編集を引き継ぎ、ようやく以上の形が整いました。今号は、大会報告に加え、会員諸氏のご活躍の一端の紹介記事が中心になりました。まだまだ御報告願いたい、国際学会での別府恵子氏(1986年4月)や高瀬ふみ子氏(1987年3月)等の御活躍がございしますが、紙面の都合で割愛させていただきました。お忙しいなか御寄稿・御助言をくださいました皆様、どうも有り難うございました。会員の皆々様のますますの御活躍、多くの卒業生の皆さまの新入会を得て、本会のいっそうの発展を願っております。

## KCELS Newsletter 編集委員

(第11回 KCELS 準備委員)

- A. Banerjee • 原田 園子 • 泥谷 征人
  - 本城 智子 • 高瀬ふみ子 (ABC順)
- 写真撮影 高瀬ふみ子

## お 知 ら せ と お 願 い

神戸女学院大学英文学会の郵便振替口座が設置されましたので、年会費の納入にご利用ください。

番号 神戸0—9323

名称 神戸女学院大学英文学会

なお、新入会を随時、受付中ですが、入会金は不用です。より多くの卒業生の皆様が入会され、研究活動の発展と交流の促進をしていきたいと願っております。

また、正会員の方で新しく専任校がお決りの方や移動がありました方は、事務局(神戸女学院大学英文学科事務室)までご一報ください。さらに、ご専門分野での研究書出版物が新刊行された方も、ご一報ください。次回の通信でご紹介させていただきます。

## KCELS Newsletter No. 2

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4—1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323